

ランチオンセミナー

口腔機能発達不全症を有する小児の口腔管理 ～歯列咬合に問題を有する症例について～



新潟大学大学院医歯学総合研究科小児歯科学分野
准教授 齊藤 一誠

略 歴

職歴

1999年 九州大学 歯学部 歯学科 卒業
2003年 九州大学 大学院歯学研究科 歯学臨床系専攻 博士課程 修了
2005年 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 口腔小児発達学分野 助手
2007年 鹿児島大学 医学部・歯学部附属病院 発達系歯科センター 小児歯科 講師
2008年 米国Baylor College of Dentistry, Visiting Researcher
2010年 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野 准教授
2012年 新潟大学 大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野 准教授
現在に至る

日本小児歯科学会 平成30・31年度 研究倫理審査委員会副委員長
日本小児歯科学会 平成30・31年度 倫理委員会・利益相反委員会 委員
日本小児歯科学会 北日本地方会 平成30・31年度 監事
日本小児歯科学会 評議員
日本顎口腔機能学会 評議員
日本臓器保存生物医学会 評議員

日常的な「お口ぼかん」（口唇閉鎖不全）は、近年多くのマスメディアにも取り上げられる口腔に認められる症状の一つで、口腔機能発達不全の1つです。小児期の「お口ぼかん」は、歯列咬合や顎顔面の成長発達へ悪影響を及ぼすことが示唆されています。我々の研究グループにて行った3歳から12歳までの小児を対象とした全国調査によると、30.7%の小児に日常的な口唇閉鎖不全が疑われ、高齢期にも同様な口唇閉鎖不全が散見されようになることを考慮すると、齲蝕や歯周病と並び国民病として考えるべき口腔における疾病であると言えます。小児の診察では、医療面接により口唇閉鎖不全に関連する因子の有無と原因を抽出し、臨床所見とともに診断することになります。耳鼻咽喉科に関連する疾病が原因と考えられるなら、まずは専門科での疾病の改善を優先します。また、歯列咬合に問題があり口唇閉鎖が難しい場合は、先に口唇閉鎖が可能な歯列咬合まで改善することをお勧めすることもあります。口唇閉鎖不全への歯科的対応としては、口唇を閉じる習慣の確立、正常な舌位の認識と維持および正常な咀嚼と嚥下の確立などが挙げられます。また、口唇閉鎖力の測定も有効な口唇閉鎖不全の診断基準となります。口唇閉鎖力の測定は、臨床検査法の1つとして定量化することができるので、診断基準が明確になり、口唇を含めた表情筋のトレーニングを併用することで、口唇閉鎖力を向上させることができます。そこで本セミナーでは、歯列咬合など形態に異常を認め、かつ口唇閉鎖不全を有する小児における口腔管理について症例を提示しながら解説したいと思います。